

「檸檬」解説

池田一彦

いま、梶井基次郎の「檸檬」を、作家・作品にまつわる先入見を排して、あくまで一つの独立し完結した作品として、その「言葉」に密着しつつ読んでいこうと思う。四百字詰原稿用紙に換算して約十三四枚程度の短篇に過ぎないが、密度の高いこの作品が、その際果たしてどのような相貌をもつて我々の前に立ち現れてくるだろうか。

有名な冒頭の一節。

えたいの知れない不吉な塊が私の心を始終^{おぼ}庄へつけてゐた。焦燥と云はうか、嫌悪と云はうか——酒を飲んだあとに宿酔^{ふつかよ}があるやうに、酒を毎日飲んでゐると宿酔に相当した時期がやつて来る。それが来たの

だ。これはちよつといけなかつた。結果した肺尖カタルや神経衰弱がいけないのではない。また背を焼くやうな借金などがいけないのではない。いけないのはその不吉な塊だ。以前私を喜ばせたどんな美しい音楽も、どんな美しい詩の一節も辛抱がならなくなつた。蓄音器を聴かせて貰ひにわざわざ出かけて行つても、最初の二三小節で不意に立ち上つてしまひたくなる。何かが私を居堪らずさせるのだ。それで始終私は街から街を浮浪し続けてゐた。

「焦燥」と言い、「嫌悪」と言つてみるものの、そしてより具体的に「結果した肺尖カタルや神経衰弱」「背を焼くやうな借金」ではないと断つてゐるものの、何か適切な言葉を探しあぐねたかのように「私」は「えたいの知れない不吉な塊」「その不吉な塊」と繰り返し、「何か」と不特定で抽象的な指示語のレベルにとどまる。しかも、心身の健康や借金は、敢えて否定されるだけ、かえつて「不吉な塊」の實質を形成してゐるのではないかと読み手としては勸練つてみたくもなるのである。そして、この心の圧迫感は「どんな美しい音楽」にも「どんな美しい詩の一節」にも軽減・解消させられることはないのである。

そんな「私」が引き付けられるのは、とりあえず「見すばらしくて美しいもの」であつた。「美しい音楽」「美しい詩」ではなく、「見すばらしくて美しいもの」——「壊れかかつた街」とか、どこか親しみのある「裏通り」とか。これは少し後で「二銭や三銭のもの——と云つて贅沢なもの」「美しいもの——と云つて無気力な私の触觉に寧ろ媚びて来るもの」と変奏されるが、要するにただに美しいものでは駄目なのである。当時の「私」に何かしら共通する「見すばらし」さを伴つた、「私」の心に鋭角的にはなく馴染んだ形で接してくる美しさでなければ、「私」は拒否反応を起こしてしまふといった状況である。そんな「私」は、意図的に現在いる京都では

ない何処か遠い所にいるという「錯覚」を持つとうとし、重ねて「想像の絵具」を塗りつけることによって「錯覚と壊れかかった街との二重写し」の中に「現実の私自身を見失うのを楽し」もうとする人間である。異郷への逃避行。「現実」の桎梏に耐えきれない衰弱した「私」の心が強調される。

私はまたあの花火といふ奴が好きになつた。花火そのものは第二段として、あの安つばい絵具で赤や紫や黄や青や、様ざまの縞模様を持つた花火の束、中山寺の星下り、花合戦、枯れすすき。(略) そんなものが変に私の心を唆つた。

それからまた、びいどろと云ふ色硝子で鯛や花を打出してあるおはじきが好きになつたし、南京玉が好きになつた。またそれを嘗めて見るのが私にとつて何ともいへない享樂だつたのだ。あのびいどろの味程幽かな涼しい味があるものか。(略) 全くあの味には幽かな爽かな何となく詩美と云つたやうな味覚が漂つて来る。

察しはつくだらうが私にはまるで金がなかつた。とは云へそんなものを見て少しでも心の動きかけた時の私自身を慰める為には贅沢といふことが必要であつた。(傍点原文)

この後、先程引いた「二銭や三銭のもの」云々といつたことが続くのである。「私の心」に親しいのは、華麗に夜空に舞い上る花火自体ではなく、「安つばい絵具」に色着けされた物体としての花火であり、「びいどろ」の味の「幽か」さであつた。しかも「私」には「まるで金がな」い。先に「借金」と述べ、今また「まるで金がなかつた」と述べていることは重要である。おそらく心身の不健康さと深く関わりつつも、それより「私」の心の状態について重い意味を持つているのがこの「金」なのである。続く段で、「生活がまだ蝕まれてゐなかつた以前私の好きであつた所」として「丸善」が紹介されるが、「もう其頃の私にとつては重くらしい場所に過ぎな」

くなるのは、「書籍、学生、勘定台、これらはみな借金取の亡霊のやうに私には見える」からであった。「丸善」は「借金取の亡霊」に満ちているので、最終部にも「あの氣詰りな丸善」という、「氣詰り」な感じの最大の原因はやはり「金」であったと言つてよからうと思ふ。

だが、右引用箇所でも私のもつとも氣になる点は、頻出するある一語なので、それは右引用箇所だけでも四回用いられている「あの」という連体詞である。手元の辞書に拠れば、「○話し手から遠く離れたものや事柄をさす。○話し手、聞き手に共通の話題・事柄である意を示す」(『新潮国語辞典』第二版)、「①話し手からも聞き手からも離れた所にある物をさす。②話し手も聞き手もすでに知つている事柄をさす」(『大辞林』第二版)などあつて、日常でもよく用いられる珍しくもない語なのであるが、「花火」やその「安つばい絵具」に冠されるのはともかくとして、「びいどろの味」あたりになると、果たして読み手は語り手である「私」とそれを「共通の話題・事柄」[聞き手もすでに知つている事柄]であるとして易々と受け容れることができるのであろうか。「私は幼い時よくそれを口に入れては父母に叱られたものだ」と言うが、同種の体験を有する読み手にしかそれは通じない。同種の体験を全く持たぬ読者にとつて「あのびいどろの味」云々と言われた時、読者としてできるのはせいぜい遠く「私」の味覚体験を想像の力によつて追体験することくらいではなからうか。だが、「びいどろの味」程度なら、別に構えて「あの」という連体詞との結合を云々するには及ばない、という考えもあろう。実は、「檸檬」は、「あの」に限らず「この」「その」「あんな」「こんな」「そんな」といった連体詞(それに「あそこ」「そこ」といった代名詞を加えてもよい)の多出するテキストなのである。以下、重要と思われるものをいくつか引いていつてみよう。(以下、傍点は筆者)

○（果物屋の紹介の箇所——筆者）何か華やかな美しい音楽の快速調アップレグロの流れが、見る人を石に化したといふゴルゴンの鬼面——的なものを差しつけられて、あんな色彩やあんなヴォリウムに凝り固まったといふ風に果物は並んでゐる。（略）——実際あそこの人参葉の美しさなどは素晴しかった。

○また其処の家の美しいのは夜だった。（略）然し其の家が暗くなかつたら、あんなにも私を誘惑するには至らなかつたと思ふ。

○一体私はあの檸檬が好きだ。レモンエロウの絵具をチューブから搾り出して固めたやうなあの単純な色も、それからあの丈の詰つた紡錘形の恰好も。（略）あんなに執拗しつこかつた憂鬱が、そんなものの一顆で紛らされる——或ひは不審なことが、逆説的な本当であつた。

○その檸檬の冷たさはたとへやうもなくよかつた。その頃私は肺尖を悪くしていつも身体に熱が出た。（略）その熱い故だつたのだらう、握つてゐる掌から身内に浸み透つてゆくやうなその冷たさは快いものだった。

○実際あんな単純な冷覚や触覚や嗅覚や視覚が、ずっと昔からこればかり探してゐたのだと云ひ度くなつた程私にしつくりしたなんて私は不思議に思へる——それがあの頃のことなんだから。

○（檸檬を手にして——筆者注）汚れた手拭の上へ載せて見たりマントの上へあてがつて見たりして色の反映を量つたり、またこんなことを思つたり、

——つまりは此の重さなんだな。——

その重さこそ常づね私が尋ねあくんでゐたもので、疑ひもなくこの重さは総ての善いもの総ての美しいも

のを重量に換算して来た重さであるとか、

○平常あんなに避けてゐた丸善が其の時の私には易やすと入れるやうに思へた。

○以前にはあんなに私をひきつけた画本がどうしたことだらう。一枚一枚に眼を晒し終つて後、さてあまりに尋常な周囲を見廻すときのあの変にそぐはない氣持を、私は以前には好んで味つてゐたものであつた。

用法的に自然で、特に問題の無いものも敢えて併せ引用し傍点を付してみたが、総じて語り手である「私」の心の内だけで、自己了解的に用いられる「あの」「あんな」等の有り様に氣付くであらう。(そう言えば、冒頭の「えたいの知れない不吉な塊」という表現も、具体性を欠いた、「私」だけに通ずる自己了解の言葉以外のなものでもないであつた。)一顆の檸檬を手にして「——つまりは此の重さなんだな。——」と言われても、それは「私」にその時その場所その状況下で感じ取られたものであつて、限り無く「私」一個人の特殊な体験として「私」の内部に沈潜してゆく体のものなのである。その極め付けが、右引用の五番目に挙げた「それがあの頃のことなんだから」の「あの頃」である。当然読み手にはそれがいついかなる時のことであるのか全く見当がつかない。(それ以前に「その頃」という表現が四回用いられているが、「その頃」から「あの頃」へは自己への内的没入の程度において格段の深化が認められる。)かくの如く、「檸檬」の語り手である「私」は、外部に向けて言葉を発しているかのようにでありながら(果物屋について語る際、「此処でちよつと其の果物屋を紹介したいのだが」などという表現は確かに見られるのだが)、事實はこの「私」という語り手は、生の体験や感覺、語るべき情報・内容といったものを、恰もトグロを巻くかの如く「私」みずからの内へ内へと求心的に引き込んでいってしまうのである。そこにあるのは、外部から孤立した「私」という正に自閉的な空間＝場所なのである。作品「檸檬」を読むという時、それはその世

界全体がそうした「私」を語り手・主人公とする、「私」によって始終を統括された物語世界なのだということ
を肝に銘じてかからなければなるまい。

以上の事情は、檸檬を手にした「私」の「それにしても心といふ奴は何といふ不思議な奴だらう」という自
己の内面への反省的意識についても言えるし、檸檬の「冷たさ」も先に引用したように「握つてゐる掌から身内
に浸み透つてゆくやう」に感じられる「冷たさ」だったのである。全てが内面の深奥へと向かつて行く「私」の
「心」の特性。それは果たして「一顆」の「檸檬」とどのように関わるのか、次にそれを見てゆこう。

八百屋で手に入れた「檸檬」は束の間「執拗かつた憂鬱」から「私」を解き放ち、「幸福」を「私」に味わわ
せる。「檸檬」の与える「単純な冷覚や触覚や嗅覚や視覚」によつて「私」は「何だか身内に元気が目覚めて来た」
と感じ、特にその「重さ」には「総ての善いもの総ての美しいものを重量に換算して来た重さ」を見出し、「借
金取の亡霊」の巢窟「丸善」に立ち向かうことになる。そして「私」は再び挫折する。「幸福な感情」は逃げて
ゆき「憂鬱」な気分に関われるのである。「私」は「画本の棚の前」へ行き、呪われでもしたように「画集の重
たいのを取り出」してはバラバラとはぐり、そのままそこに置いては「また次の一冊を引き出」すという余人に
は不可解な行動を繰返し、本を積み重ねて行くが、やがて「袂の中の檸檬を憶ひ出」す。

私にまた先程の軽やかな昂奮が帰つて来た。私は手当り次第に積み上げ、また慌しく潰し、また慌しく築
きあげた。新しく引き抜いてつけ加へたり、取去つたりした。奇怪な幻想的な城が、その度に赤くなつたり
青くなつたりした。

「私」は「本の色彩」を按配するという一種創造的な営みを完成させ、その「城壁の頂き」に一類の「檸檬」を据えつける。児童にも似たそれらの営みの挙句はどうなったか。

見わたすと、その檸檬の色彩はガチャガチャした色の諧調をひっそりと紡錘形の身体の中へ吸収してしまつて、カーンと冴えかへつてゐた。私は埃っぽい丸善の中の空気が、その檸檬の周囲だけ変に緊張してゐるやうな気がした。

サラリと読み流してしまふと気が付かずにしまふが、実は右の私に傍点を施した箇所、文章としては問題がある。「その檸檬の色彩は」ではなく、「その檸檬は」とあるべき所なのである。だが、私がここで注意を喚起したかったのはそのことではない。「檸檬」がその周囲の情景を「ひっそりと紡錘形の身体の中へ吸収してしまつて」という、その点が重要なのである。「檸檬」の色彩が周囲に放射・拡散して行くのではない、逆に周囲の色彩をそれみずからの「身体の中へ吸収」しているというのである。これは、先に述べ来つた「私」の心性と見事に相似形を為すと言ふべきで、敢えて言うならば、「檸檬」はその性と質に於いて「第二の『私』」とでも呼ぶべき存在だつたのである。いわば「私」に対する「もう一人の私」、「私」の心の特性そのままに「私」の眼前に現出した「もう一人の私」だつたと考えることが可能なのである。更にもっと一般的な語を用いるならば、「檸檬」は正しく「私」という自己の「分身」「自画像」であつたのだ。ひたすら自己の殻の内部へ閉じ籠ると、外界をもみずからの内へ吸収してしまふのと、微妙なニュアンスの違いを認めた上で敢えて、なお、外から内へのベクトルの共通性をこそ重んじて私は右の如く「私」と「檸檬」の関係を捉える。

さて、画集の「城壁の頂き」に「檸檬」を据え置いたまま丸善を出るといふ、不意に「私」を襲つた「第二の

「アイディア」を實行したあとには次のように描かれ、物語は閉じられる。

変にくすぐつたい気持が街の上の私を微笑ませた。丸善の棚へ黄金色に輝く、恐ろしい爆弾を仕掛けて来た奇怪な悪漢が私で、もう十分後にはあの丸善が美術の棚を中心として大爆発をするのだつたらどんなに面白いだらう。

私はこの想像を熱心に追求した。「さうしたらあの気詰りな丸善も粉葉みじんだらう」

そして私は活動写真の看板画が奇体な趣きで街を彩つてゐる京極を下つて行つた。

これより以前、「私」が丸善で「一枚一枚に眼を晒し終つて後、さてあまりに尋常な周囲を見廻すときのあの変にそくはない気持」を味わう、その「変にそくはない気持」という周囲への違和感が、先の「檸檬」の周囲に漲つていた「変に緊張してゐるやうな気」と通底していることを指摘しておきたいが、今三たびここに「変にくすぐつたい気持」（但し、これは、右引用部分直前の段落に「私は変にくすぐつたい気持がした」云々とあるのを受けてのリフレインである）という、それらの「変」な「気（持）」は、第三のそれが多分に人に知られぬように悪戯を仕掛ける子供の気持ちに通じるものがあつて前二者と異なるニュアンスがあるということを認めたと上で、どれもやはり「檸檬」Ⅱ「もう一人の私」にまつわることがゆえのものだと私は解釈する。しかし、何故「檸檬」が「爆弾」に擬せられるのだつたか。この一見唐突な見立て、組み合わせは、どのようにして可能だつたのか。

「私」は、外界へ向けて解放されたかつたのである。「えたいの知れない不吉な塊」に絶えず圧迫され、自らの殻を突き破ることなく、逆に内へ内へと内攻することしか知らないかのような「私」の心が遂にみずからを否定し、みずからに反発する——無意識的であつたらうが、「私」は現状としてある苛酷な生きづらさからみずから

を解き放つべく、内から外へのベクトルを選択した。しかも「私」自身の現実においてではなく、「もう一人の私」に仮託した想像の領域において。「檸檬」が「爆弾」で、「大爆発」するのが「面白い」というのは、正にこの意味においてである。「檸檬」を「爆弾」、自身を「奇怪な悪漢」ともつばら見立てに打ち興じている風の「私」であるが、その実、ここにおいて主体たる「私」は、みずからの解放願望をこそ「第二の『私』」「もう一人の私」である。「檸檬」に仮託して語っていたのである。勿論「気詰りな丸善」は、先に触れたように「借金取の亡霊」の巢窟であり、もつと言えば「金」や心身の苦痛をはじめとする、あらゆる「現実」的なるものの象徴である。しかも、その丸善を「粉葉みじん」にするものは、逆説的に「黄金色」に輝く恐ろしい爆弾である。先に「レモンエロウの絵具をチューブから搾り出して固めたやうなあの単純な色」と言われていたものは、今や実にさりげなく「黄金色」と言い換えられ、爆発はこれも逆説的な意味合いをもつて「美術の棚を中心として」起こるであろうと「私」によつて夢想される。首尾の見事に照応した構成と言うべきであろう。「活動写真の看板画が奇体な趣きで街を彩つてゐる」風景は、こうした「見すばらしくて美しいもの」に親炙してきた「私」の溶け込んでゆくに、おそらく最もふさわしいものであったに違ひなく、閉ざされた自己の分身たる「檸檬」の「爆弾」を置き去りにしてきた「私」の足取りは、これもおそらく、今までになく軽々としたものであったに違ひないのである。

(了)